

## テーマセッション2

大学内に開設した「家族支援室」の活動  
—大学という場での家族看護実践・研究の展開と課題—

前原邦江, 大月恵理子, 森恵美 (千葉大学看護学部)

## 1. はじめに

千葉大学看護学部「家族支援室」は、21世紀 COE プログラム拠点形成にあたり開設された看護実践・研究施設である。本学の教員・大学院生である看護職者が各専門分野の援助ニーズに応じ看護サービスを提供すると同時に、看護方法の開発および評価研究の場、看護専門職者育成の場として、看護学の構築に寄与することを目的としている。家族支援室には家庭的な雰囲気のソファやプレイスペースがあり、ワンウェイミラーで隣室から観察できる構造になっている。また、対象者の行動や表情を録画できるよう部屋の四隅にカメラを配置し、映像をパソコンで解析できる行動コーディングシステムを備えている。

このテーマセッションでは、筆者らが COE サブプロジェクトの一環として平成 16 年度から取り組んでいる育児支援プログラム開発・評価研究の一部をご紹介します、大学という場での家族看護実践・研究の展開と課題について考えてみたい。

## 2. 出産後間もない時期にある母児と家族への育児支援の実践と評価に関する研究

本研究は、出産後間もない時期にある母児とその家族を対象に「親子ふれあいクラス」を実施し、援助ニーズの把握および育児支援プログラム開発につなげることを目的としたパイロットスタディーであり、千葉大学倫理審査委員会の承認を得て行った。本学近郊の A 病院で出産した褥婦にパンフレットを配布し、回収箱及び FAX 等で応募を受け付けた。「親子ふれあいクラス」は、個別または少人数制、3~4 回の親子のスキンシップ実習と育児相談からなるプログラムである。対象者 7 組の承諾を得て援助場面を録画し、親子の行動を分析した結果、母親が児の反応をみながら働きかける行動が認められたケース、母親の働きかけに児が反応することを体験し母児の呼応が増加したケース、年長児を含めた新たな家族関係形成のストレスが緩和されたケースがあった。また、児の経過観察のため A 病院でのフォローにつなげたケースが 1 例あった。希望者には電子メールでやりとりをし、ビデオテープを記念品として贈呈したところ、これまでの育児を振り返り子どもの成長を実感できたという反響があった。また、質問紙法により対象者の満足度を調査した結果、ほぼ全員から「とても満足」「満足」との回答が得られた。

これらの結果を基に、大学という場のメリット・デメリットを考慮して、育児支援プログラムを改良し、現在、その実践と評価に取り組んでいる。

## 3. 討論したいこと

保健・医療機関から独立した看護チームによる家族看護の可能性、医療・地域との連携や大学に求められる役割など、家族看護実践・研究の場としての大学内「家族支援室」の課題と展望について、参加者の皆様と共に考えたい。